

# 木と鳥になった姉妹

小川未明

青空文庫



あるところに、人のよいおばあさんが住んでいました。このお  
 ばあさんはいろいろな話を知っていました。怖ろしいような話も、  
 不思議な話も、またおかしいような話なども知っていました。こ  
 の話は、やはりそのおばあさんが聞かせてくれたのであります。  
 昔、昔、あるところに、仲のいい姉と妹とがありました。姉は  
 よく妹をかわいがり、妹はまたよく姉を慕いました。  
 姉は、氣質のきわめてやさしい人柄でありまして、すぐに涙  
 ぐむというほうでありましたけれど、あまり顔が美しくありませ  
 んでした。妹のほうは、やはり、やさしいにはやさしかったけれ  
 ど、姉にくらべると、快活なほうでありました。そして、目は

鈴を張ったように美しく、唇の色はとこなつの花のように紅く、

髪は黒く長く肩へ垂れて、まれに見るような美しさでありました。

二人は、だんだん年をとるにつれて、河辺を歩いているときも、

水に映った自分の姿に気をとめてながめるようになりました。

ある日のこと、二人は、小川にそうて散歩をしていました。川

の辺には、白い花や、桃色の花が咲いていました。そのとき、

姉は水に映った自分の姿をながめて、顔を赤くしながら、

「なんとというおまえは、美しくこの世に生まれておいでだろう。

それにひきかえて、私は、なんとという醜い姿で、生まれてきたで

しょう。私は、だれをもうらみません。これもきつと、この前の

世で、おまえはよいことをたくさんさつたので、それで神さま

が、そんな美しい姿うつくすがたにしてくだされたのです。私は、覚えおぼのあるはずがないけれど、なにか罪つみを犯おかしたので、それで神かみさまは、この世よへこんな醜みにくく生まれさせられたのです。」と、姉あねはいいました。

これを聞きくと、妹いもうとは、目めをみはってびっくりして、

「姉ねえさん、なにをおいなさるのですか。人間にんげんは、顔かおや、形かたちよりも、魂たましいが大事だいじなのです。魂たましいの美しいほうが、どれほど、貴とうといかわかりません。姉ねえさんのように、やさしいしんせつな、親孝行おやこうこうな人ひとがたくさんありますようにか。あなたのお心こころは、あの空そらの星ほしよりも、きれいで輝かがやかしくあります。いま、姉ねえさんのおつしやつたように、また人間にんげんが、今度こんどの世よに生まうれてくるものなら、姉ねえさ

んは、この世界じゆうでなにものよりも、美しく、めぐみ深く、またみんなから愛せられ、慕われるものになられるでありますよ。」「と、妹はいいました。

すると、姉は、この言葉を聞いているうちに、いつしか涙ぐんでしまいました。

「いえいえ、もうおたがいに、今度の世のことなどはいいますまい。ただ、私はいつまでもおまえと仲よく、こうして暮らしたいとおもいます。それがかなわないような気がして悲しいのです。あの花よりも美しい、あのこちようよりもきれいなおまえが、どうしていつまでもこんな寂しいところに住んではいなかろうと思おうのです。それを考えると、私の胸はふさがって、いつぱ

いになります。」と、姉あねはいいました。

「姉ねえさん、私わたしが、あなたやお父とうさんを捨すてて、どこへかゆくといわれるのですか。私わたしは、一生しょうとうお父とうさんや、あなたのそばで暮くらします。そして、また、今度こんどの世よにも、お慕したわしい姉ねえさんの妹いもうととなつて、かならず生うまれてまいります。」と、妹いもうとは泣ないて姉あねにすがりました。二人ふたりは、たがいに抱だき合あつて、しばらく無言むごんでありました。

ふとしたことから、姉きょうだい 妹ちちおやの父親ちちおやが目めを患わずらいました。はじめのうち、じきになおるだろうと思おもつていましたが、だんだん悪わるくなつて、一ひと通りとおでない不自由ふじゆうをするようになりました。

ことに孝行こうこうの姉あねは、昼ひるとなく、夜よるとなく看かんびよう病びようをして、ど

うかして父親ちちおやの目めがなおらないものかこころと心を傷いためました。姉あねの  
疲つかれたときは、妹いもうとがかわつて看かんびよう病びようをいたしました。けれど、  
悪あく性せいの眼がん病びようとみえて、なかなかおりそうにも思おもわれませ  
んでした。

「おまえは、家うちにいて、よくお父とうさんの看かんびよう病びようをしていてくだ  
さい。私わたしは、薬くすりをさがしてきますから。」と、姉あねはいい残のこして、  
高たかい山やまへ上のぼつたり、深ふかい谷たにに下くだつたりして、眼め薬ぐすりになる草くさの根ね  
や、岩いわ間まから滴したたる清しみず水みずを持もつてきて、いろいと看かんびよう病びようをいた  
しました。けれど、それらの薬くすりの力ちからでも目めはなおりませんでした。  
「ああ、私わたしたちの力ちからでは、とてもお父とうさんの眼がん病びようをなおすこ  
とができない。どうしたらいいだろう。どうか、神かみさま、私わたしたち



いのちの命に換えてもよろしゅうございますから、父の目をもとのようになおしてください。」と、二人は神さまに祈っていました。

すると、ある日のこと、見慣れない男の旅人が門口に立って、道を聞きました。そのとき男は、二人が父親の看病をしているのをながめて、

「ああ、その目はなおりつこのない悪性な眼病だ。おまえさんたちが、いくら看病をしてあげても無効でしょう。」と、いいました。

姉と妹は、びっくりして、その男の顔を見上げました。その男はおちついて、

「なにも疑いなさるな。私は、目のことをよく知っています

。「といいました。

「そんなら、どうか、あなたのお力ちからで父ちちの目めをなおしてください。さることはできませんか。」と、二人ふたりは訴うえました。

「私わたしは、ここに目めの靈藥れいやくを持もっています。この藥くすりは、千万まんの貝かいを碎くだいて、その中なかから探さがした目めの靈藥れいやくで、どんなものにも換かえ難がたい貴重きちような品しなです。なんでも南みなみの国くにの王おうさまが、この藥くすりを国くにを賭かけてお探さがしになつていふことことを聞きいて、いま持もつてゆく途とちゆう中ちゆうにあるのです。」と、男おとこは答こたえました。

二人ふたりは、これこれを聞きいて、ますますびつくりしました。

「お願ねがいがでござごいます。ごらんごらんのとおり、私わたしたちはなにもそのお薬くすりに換かえるほどのものを持もっていません。命いのちをさしあげます。ど

うぞ、そのお薬を少し分けてください。」と、二人は男に向かつて頼みました。

「一つしかない薬を分けることはできない。が、そんなら、私のくれないというものをくださるなら、この薬をあなたのほうにさしあげましょう。」と、男はいいました。

「なんでも、私たちの持っているものなら、みんなあなたにさしあげます。」と、二人は誓いました。

男は、小さな箱の中から、銀色に光る小豆粒ほどの石を取り出しました。

「さあ、これです、この石をさらの上で、いつまでもかかつて溶いて、その水を目につけるのです。」と、教えてくれました。

姉あねいもうとと妹いもうとは、その小ちいきな光ひかる石いしを、さらの白しろい面めんで溶とかしました。そして、それを父ちち親おやの目めにつけました。すると不ふ思議しぎに、いままで、閉つぶっていた目めが開ひらいて、見みるまに、めきめきとなおりはじめたのです。

二人ふたりは、あまりの靈れい薬やくのききめおどろに驚おどろいて目めをみはりました。

そのとき、男おとこは、

「さあ、私わたしの望もちみを申もうしあげます。私わたしに、どうぞ、この美うつくしい妹いもうとさんををください。」といいました。

姉あねいもうとと妹いもうとは、心こころの中なかで当とう惑わくいたしました。けれど、前まえの約やく束そくをどうすることもできませんでした。

「そんなら、姉ねえさん、私わたしはゆきます。」と、妹いもうとは泣ないていいまし

た。姉も、また父親も泣いて別れを悲しみました。しかし、い  
 まさらどうすることもできませんでした。ついに、妹は、男に連  
 れられて、この家を出ていったのであります。  
 妹がいつてしまつてから、姉はさびしく日を送りました。いま  
 ごろ妹は、どこにどうして暮らしているだろうと思ひました。妹  
 からは、なんのたよりもありませんでした。姉は一人、小川にそ  
 うて歩いてはたたずみ、たたずんではまた歩いて、妹のことを思  
 つていました。いつか、二人は、いつしよにこの路を歩いたこと  
 もあつたのだと思ひました。足もとに咲いている草の花を見るに  
 つけ、空に漂う、雲の影を見るにつけ、妹の身の上を案じていま  
 した。

それからというものの姉は、毎日、川の辺にきてはたたずんで、  
 じつと水の面に映る自分の姿を見てはものを思い、また、かなた  
 の空に飛ぶ雲の影を見ては涙に暮れていきましたが、不思議や、あ  
 る日のこと、姉は日が暮れても帰らずにひとところに立ちつくして  
 いますと、一夜の中に姉の姿は消えて、そこに一本の柳となつて  
 いたのであります。

姉は、とうとう、柳の木になつてしまいました。

妹は、家を出てから、その男の人に連れられて、知らぬ他国を  
 旅して歩きました。その間に、男はまた苦心して、目の良薬  
 を探しました。そして、やがて、海を渡つて、南の国の王さまに  
 献じようといたしました。

おとこいもうと 男と妹は、船に乗つて海を渡りました。幾日も、幾日も、航海しました。海の真ん中に出ますと、どこを見ましても、山も見えなければ、また島影も見えませんでした。ただ、夜が明けると真つ赤な太陽が東の方から上がりました。また、日暮れがたになると、かなたの地平線が炎のように燃えて、太陽は海に沈みました。二人の乗っている船は、その夕焼けの方を指してすすみました。そして、多くの日数を経てから、ついに船は、南の志した国の港に着きました。男は、さつそく靈薬を王さまに献じたのであります。そのお礼として、男は広い土地をもらつて、なに不足ない暮らしをすることができました。

その国は、いつもいろいろな花が咲いていました。そして、い

つも夏のなつのように草木くさきがしげつて美しいちようが飛とんでいました。

妹いもうとは、家うちをたつてから、幾年いくねんかになります。その間あいだ、父ちちのこ

とを思おもつたり、姉あねのことを思おもつたりしました。しまいには、あま

りに思おもいつづけましたので、ついおとこに病びょうき気ことなつて、毎まい日にちもの

もいわずに沈しずんでいました。男おとこは、これを見みてかわいそうに思おもい

ました。

「こんなふそくに、なに不足ふそくなくても、おまえは、故郷こきようへ帰かえりたいの

か。」と、男おとこはいいました。

妹いもうとは、目めになみだいっばい涙なみだをためて、黙だまつてうなずきました。

「そんなら帰かえつてもいい、けれど、幾千里いく千里となく遠とおい。船ふねに乗のつ

ても幾年いくねんかかるかしのれない。その間あいだには、雨あめが降ふり、風かぜが吹ふく



だろう。おまえは女の身で、どうして帰ることができようか。」  
と、男はいいました。

妹は、これを聞くと、悲しくなつて泣いていました。

妹は、海岸の岩の上で、沖の方を見て、故郷に憧れて泣い

ていました。そのとき、ちようど王さまのお通りがありました。

王さまは、女の泣いているのを見て、家来を遣わして、その泣

いている理由をたずねられました。妹は、一部始終のことを物

語りました。王さまは、これをお聞きになると、たいへんに妹

をあわれに思われました。そして、家来の中から魔法使いのじ

いさんをお呼びになりました。そして、この女を、

故郷に帰してやる工夫はないものか、とおっしゃられました。

まゆ毛げの長ながい、つえをついている、白髪しらの魔法使まほうつかいは、うやうやしく、頭あたまを下さげていいますには、

「このままの姿すがたでは、とても幾千里いくとなく遠とおい国くにへ帰かえることはできません。なにか姿すがたを変かえなければなりません。」と申もうしあげました。

「なんなりとも、汝なんじちの力ちからでできることなら、姿すがたを変かえてゆけるよ  
うにしてやれ。」と、王おうさまはいわれました。

魔法使まほうつかいは、ついでにいるつえの先さきで女おんなの肩かたをつつきました。  
するとたちまち、美うつくしい妹いもうの姿すがたは消きえて、一羽わのつばめとなつて  
しまいました。

つばめは、王おうさまの頭あたまの上うへの空そらを、二、三べんまわりました。

そして、どことなく影かげを消けしてしまひました。

つばめは、昼ひるとなく、夜よるとなく海うみの上うえを渡わたりました。疲つかれたと

きは、船ふねのほばしらの頂いただきに止とまって休やすみました。そして、幾いく日にち

かの後のち、もとの我わが家やへ帰かえつてきました。父ちち親おやは、まだ達たつ者しや

でいられました。けれど、鳥とりになつてしまつた妹いもうとは、もはやもの

をいうことができませぬ。つぎに姉ねえさんを探さがしました。けれど見み

あたりませぬ。妹いもうとは、川かわの辺ほとりへ飛とんでゆきました。すると、なつ

かしい姉ねえさんの姿すがたによく似にた柳やなぎの木きが一本ぼんた立たつていました。これ

は、きつと姉ねえさんにちがいないと思おもいましたから、その枝えだに止とま

りました。

つばめは、柳やなぎの木きの枝えだに止とまつて、しきりに快かい活かつになきまし

た。けれど、柳やなぎの木の枝えだは、風かぜに吹ふかれて、おりおり音おとなく揺ゆれるばかりで、なんの答こたえもいたしませんでした。

つばめは、秋あきの末すえまで、毎まい日にちその柳やなぎの木のあたりを飛とんで、  
ないていました。けれど、寒さむくなつたときに、どこへか飛とんでい  
つてしまいました。それからというもの、毎まい年ねん春はるになると、ど  
こからか、つばめが飛とんできて、柳やなぎの木きに止とまってないしまし  
た。

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「いづも雑誌」

1920（大正9）年7月

※表題は底本では、「木《き》と鳥《とり》になつた姉妹《きよ  
うだい》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年10月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# 木と鳥になった姉妹

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>